

人里へのニュースレター

日本ホタルの会 1994/1 創刊号



リング状に発光するラゴフタルムスの雌成虫（説明は9ページ）

日本ホタルの会の目指すもの

—「人里へのニュースレター」発刊に際して—

日本ホタルの会会長／京都大学名誉教授 日 高 敏 隆

子どものころから昆虫が好きで、したがって草や木も好きだったぼくにとって、それまで親しんできた自然の小さな一区画が、何かの理由で失われてしまうのを見ると、いつもとても悲しい気持ちになる。

昔は小さな一区画が失われるだけだった。しかしその後、経済が進み、技術が進み、人間の近代主義的欲望がふくらんでくるにつれて、自然が失われるスピードも規模も急速に増大した。近頃さかんに言われるとおり、自然の破壊は全地球的規模のものとなった。ぼくも当然、“自然を守れ、開発はするな”と叫びたい気持ちである。

だがそこで、ぼくはずっと考えこんでしまっていた。“自然を守れ”と叫んで闘っていけば、自然は本当に守れるのか？ 開発反対とはいいたい

が、ぼく自身、便利な道路を早く作れという請願運動があったら、たちまちそれに署名する気持ちになるのではなかろうか？ そもそも、われわれにとって、“自然”とはいったい何なのだ？ アマゾンの熱帯林は自然だが、道ばたの草や小さなチョウは自然ではないのか？

“技術が提出した（環境破壊という）問題に、技術が答えることはできない”と言っている人がある（リビングストーン『破壊の伝統』講談社学術文庫）。これはぼくにはショックだった。けれどもほんとうにそうなのか？

そもそも守ろうとしているものが守りきれたためしはない。昔から城はいつかは必ず落とされたし、各地の伝統文化もほとんどすべて風前の灯である。多くの人々が守ろうとしたあちこちの自然

も、結局は守れなかった。

考え方を変えねばならない、とぼくは思った。守るのではなく創る必要があろう。では何を創るのか？そして、だれがどうやって創るのだ？

その当面の結論が“人里を創ろう”という日本ホタルの会である。

この会が動いていく中で、きっといろいろな問

題がでてくるだろう。事は考えるほど単純ではない。それもよくわかっている。しかし今、われわれは、これまでわれわれが忘れていた大切なことに気がつきはじめたような気がする。その大切なことというのは、信じこむのではなく、たえず模索をつづけてゆくということだ。

ホタルの乱舞するような環境を目指して

日本ホタルの会理事長／富山国際大学学長 佐々学

このたび日本ホタルの会の広報誌として「人里へのニュースレター」発刊されることとなり、これを通じて広く日本各地に、すでに失われたホタルの繁殖地をとりもどそうという運動がひろがることを期待している。いま私の住んでいる富山にも昔は一帯にホタルが発生していて、夏にはその乱舞する美しい世界がひろがっていたものが、いつの間にかごく限られた場所にしかホタルが見られなくなり、しかも放置しておくとも更に縮小していく運命にあるらしいことはまことになげかわしい。

ホタルの繁殖には水のきれいな所、つまり幼虫の餌となるカワニナのような淡水貝の繁殖が必要で、水の汚染と共にそのような水域が小さくなってきた。近年にはようやく川や池の水をきれいにしようという作業が日本でも開始されて、この富山の川もかなりきれいになりつつあるが、それだけではホタルは人里にかえって来ない。その幼虫がサナギになるためには土にもぐりこむこと、つ

まりコンクリートの壁だけに囲まれた水路ではだめである。底が泥で、貝も水草も淡水魚も水生昆虫も育つようなエコシステムをとりもどすこと、さらに水生生物の生育を阻害する農薬や化学薬品を使わないようにすること、などなどの配慮も必要であろう。

この会は日本にホタルだけをとりもどそうと志すものではなくて、ホタルの繁殖するような豊かな大自然をとりもどそうとする広い視野に基づいた運動である。それには国や市町村などの公共団体、水の管理に影響をおよぼしつつある数多くの多彩な企業の協力と共に、人里に住む多くの方々の理解と努力も必要である。そして、ホタルの繁殖を許すようなエコシステムの理解と助力、さらにその生物学的、環境科学的な基礎研究も進めねばならない。

再び日本中にホタルの乱舞するような環境を夢みて、この創刊号に一筆。

日本ホタルの会に期待する

東京医科歯科大学名誉教授 加納六郎

私は佐々先生の弟子である関係で、日本ホタルの会に入りましたが、もともと自然と動植物が大好きで、鳥、蛇、魚、昆虫などを飼うことに夢中でした。それで医学の道に入っても、どうも人間相手は性に合わなくて、広く自然と動物と人とのかわる医動物学を選ぶことになりました。日本

ホタルの会は、研究、教育、行政、自治体などのさまざまな立場の方々で成り立っているので、身近な生き物たちと共存する豊かな人里環境が、日本の各所に生まれていくことと期待しています。

医動物学的立場でみると、ホタルはカワニナの天敵であり、人の寄生虫病である肺吸虫症や横川

吸虫症の第一中間宿主のカワニナを食べる益虫です。しかし自然のバランスで、ホタルだけでカワニナを絶滅させることはできないし、カワニナが絶滅すればホタルも絶滅してしまいます。そこで医学の立場からは、寄生虫撲滅のための殺虫剤の使用が考えられますが、そうすればカワニナもホタルも、そのほかの生き物もいなくなってしまう。

私は、カワニナもホタルも沢山いて豊かな自然環境の中で人間も共存していくべきで、寄生虫の第一中間宿主のカワニナがいても、第二中間宿主のカニや淡水魚がいても、それらを人が生で食べさえしなければすむことです。このように豊かな人里環境の中で、人がいろいろな動植物と共存することを考えていくべきで、日本ホタルの会に大きな期待をもっています。

環境の維持は足元から

もう10年以上も前のことですが、当時環境庁の水質保全局の課長をしていたKさんから、「名水百選」といった趣向で、地域ぐるみで美しい水環境をよく守っているようなところを全国から選んでみたいのだが、県庁の担当部局にお願いしたら推薦してもらえらるだろうか、という相談がありました。私は即座に、県庁を通すのはよいのですが、この事業の趣旨が必ず市町村役場の担当者にまで届くような手段を講じておかなければいけませんよ、そうすればきっとおもしろい結果が出るでしょう、と答えました。

幸いこの事業は地方で相当の反響を呼び、中には県下で予選会を開いて推薦してこられる程熱心なところも現れて、大成功でした。最近地方を訪ねると、よくこの「名水百選」の標識を見かけま

（財）海中公園センター理事長 宇野 佐
す。名水に選定されたことが弾みになって、さらにその地の水環境の維持に力が入っているようです。

日本ホタルの会の発足のご相談が寄せられた時も、私は地方自治体、それも最小単位の市町村に参加していただくことをお勧めしました。私は環境の維持はそれぞれの足元から、自発的に始めるものと思っています。今の市町村は幾度かの合併によって、住民の足元の環境に気を配るにはあまりにも大きくなり過ぎている嫌いがあります。それでも、身近な環境の維持に始まるホタルの問題では、住民の創意と共に、それを生かす市町村の役割を重視し、それこそ地盤をしっかりと踏み締めた活動にしていきたいと思います。

それは素晴らしい、ガンバレ

観光事業に携わっている私にとって「開発と自然保護」という言葉は、つきつけられた刃のようなもので、この事業を続けている限り直接当事者としてつきまとうものだと思う。

1950年代、私は熊本県の田舎町で少年時代を過ごした。夏になると小川の周辺を無数のホタルが乱舞し、それを追い廻していたことを今でも鮮明に思い出す。

そんな私の所へ、大場、宮下の両氏がやってき

南部ワールド(株)社長 花崎 為 継
た。ホタルの人里論を熟っぽく展開した大場氏に「それは素晴らしい、ガンバレ」と言ったら、「素晴らしい、ガンバレまでは誰でも言う、それから先が問題だ」とパンチをもらったのは一昨年だった。

いずれにしてもホタルの住める環境が人間も含め生物の生存環境に一番いい。ホタルの存在が環境の善し悪しのバロメーターだということがよくわかった。

久しぶりに訪ねた懐かしの地は、一見したところ昔と大差なかったがホタルはいないと言う。同じような例が全国的に広がっているのだろうか？

この時期、単にホタルを守るだけでなく、人間も住む人里作りを目指す日本ホタルの会の存在は

大いに意義があるし、その拡がりに大いに期待したい。

そして私も「それは素晴らしい、ガンバレ」の先に、可能な限りかかわっていきたいと思う。

日本ホタルの会に期待する

長野県辰野町長 垣内基良

辰野町のゲンジボタルは、大正15年長野県天然記念物に指定され、保護がはかられてきました。戦後「はたる祭り」の復活により、ホタルを保護する声が再びおこってきましたが、ホタルの発生数は激減の一途をたどるばかりで、「蛍合戦」とか「蛍が玉になって群がる」などということは、遠い昔話となってしまいました。

町では、ゲンジボタルを町の特別シンボルに制定し、水質の改善、ホタルの住みやすい水路づくりなどをすすめて、ホタルを保護してきました。現在は、ホタルの保護増殖を中心に、小さな生き物と人がふれあうことのできる「はたる童謡公園」を建設中です。こうした結果、近年では30年前のホタル発生数になったと言われる様になりました。

全国各地で、ホタルの保護活動が行われていま

すが、私達の生活を大正時代まで戻せば、昔の様にホタルを見ることができると言われています。しかし、そのようなことはできませんので、人里に住むホタルを中心とした小さな生き物と、人との接点をどこにもっていくのが重要になってきます。この接点を見だし調整することが、これからの行政の大きな課題と考えます。

日本ホタルの会の活動は、ホタルをはじめとする身近な生き物と人里環境の調査研究・新しい意識の普及となっており、まさにこれと合致した内容だと思います。貴会の活動が生活環境を見直し、ホタルが飛びかう里づくりを夢見る多くの自治体や人々のために、これからも先進的な役割を果たしていただくとともに、会組織が一層充実されることをご期待申し上げます。

ホタル飛び交う住みよい環境づくりを

愛知県阿久比町長 山内和夫

日本ホタルの会は、平成4年に発足し2年経過いたしますが、会長をはじめとして、会員各位が精力的にホタルの保護や水辺環境の保全に取り組んでおられ感銘を受けております。

本町におきましては、昭和58年に「ホタル飛び交う住みよい環境づくり」を提唱し、自然環境の保全を図るとともに、ホタルの生息状況を小中学生や町民・町職員により分布調査を毎年実施しています。平成元年には環境庁から「ふるさといきものの里」に選定され、平成6年度全国「ホタルサミットあぐい'94」を本町において開催します。

わが町のホタルはヘイケボタルで、主に水田に

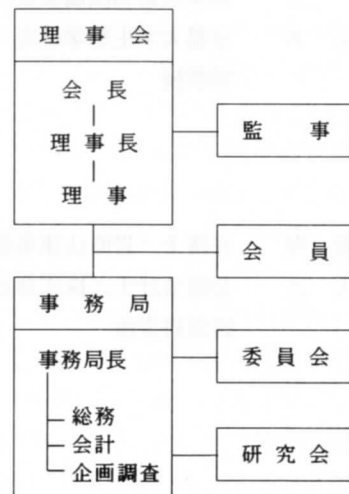
生息します。圃場整備など開発を進める中で、いかにしてホタルの住みよい環境づくりや保護をしていくかは、たいへん大きな問題であると考えています。農薬の散布状況、水田の土質・水質・通水時期など調査研究員が定点方式によって毎年調査しております。このような地道な活動や住民の方の理解により「ホタル飛び交う住みよい環境づくり」が推進できれば幸いと思っています。

日本ホタルの会が幅広い視野でのホタルの保護や水辺環境の保全のために努力されることを御期待申し上げます。

日本ホタルの会これまでの歩み

1991年度	7月	第2回「ホタルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウム開催 (10日、東京：経団連ホール)
11月 第1回日本ホタルの会設立準備委員会		
1992年度		長野県茅野市水系環境調査協力 千歳市・苫小牧市・利尻島ヘイケボタル生息環境調査協力
4月 任意団体としてスタート	8月	第1回常任理事会
6月 逗子市ホタル生息環境調査協力 横須賀市野比環境調査協力	10月	(財)日野自動車グリーンファンド助成金贈呈式(東京：日野市) 広報誌「人里へのニュースレター」創刊準備号発行
7月 箱根水系環境調査協力 釧路湿原ホタル生息環境調査協力	11月	「愛知健康の森」ヒメボタル生息環境調査協力
8月 三浦半島ホタル生息環境調査協力	12月	(財)日野自動車グリーンファンド助成金先活動発表会(東京：日野市) 南西諸島ホタル生息環境調査協力 筑波山麓ホタル生息環境調査協力
10月 第1回「ホタルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウム開催 (12日、東京：経団連ホール) (財)日野自動車グリーンファンド助成金贈呈式(東京：日野市)		
1993年度		
1月 キリンビール横浜工場親水水路視察		
2月 第1回理事会		
3月 箱根のホタルを守る会にて講演 機関誌「ホタルと人里」創刊号発行		
4月 鎌倉市老人福祉センターにて講演		
5月 内田洋行ホタル展示協力(宮崎：北川町)		
6月 相模原市水系環境調査協力 第5回ホタルサミット後援 (岐阜：本巣町) 横須賀市吉井田園環境調査協力 箱根ホタルの会にて講演		

組 織 図



日本ホテルの会役員・発起人名簿

役 員	発 起 人
会長 日 高 敏 隆 京都大学理学部名誉教授	石 井 明 国立予防衛生研究所寄生虫部 部長
理事長 佐 々 学 富山国際大学学長	宇田川 龍 男 麻布大学環境保健学部名誉 教授 宇 野 佐 助海中公園センター理事長 大喜多 敏 一 桜美林大学国際学部教授 加 藤 賢 三 国立予防衛生研究所主任研 究官
理事 宇田川 龍 男 麻布大学環境保健学部名誉 教授 大 場 信 義 横須賀市自然博物館学芸員 川 村 善 治 助日本蛇族学術研究所毒蛇 咬傷国際研修センター長 近 藤 次 郎 日本学術会議会長 高 山 房 二 助ドレックス専務取締役 圓 谷 哲 男 全国ホテル研究会事務局長 羽根田 弥 太 元横須賀市博物館館長 宮 下 衛 環境庁国立環境研究所主任研 究員 矢 島 稔 助東京動物園協会常任理事 遊 磨 正 秀 京都大学生態学研究センター 助教授	加 納 六 郎 東京医科歯科大学医学部名誉 教授 川 村 善 治 助日本蛇族学術研究所毒蛇 咬傷国際研修センター長 吉 良 竜 夫 滋賀県琵琶湖研究所所長 近 藤 次 郎 日本学術会議会長 佐 々 学 富山国際大学学長 沢 井 芳 男 助日本蛇族学術研究所理事長 下 村 修 マサチューセッツ海洋生物研究 所上級研究員兼ボストン大学 教授 沼 田 真 助日本自然保護協会会長 花 崎 為 継 沖縄県PTA連合会理事 羽根田 弥 太 元横須賀市博物館館長 不 破 敬一郎 元環境庁国立公害研究所所長 堀 栄太郎 埼玉医科大学医学部教授 矢 島 稔 助東京動物園協会常任理事 遊 磨 正 秀 京都大学生態学研究センター 助教授 脇 阪 一 郎 鹿児島大学医学部名誉教授
監事 大 山 健 児 弁護士／岩原法律事務所 田 代 大 吉 公認会計士／株式会社千代田 経営研究所	(5音順)

見るのは科学の始まり

日本ホタルの会理事／日本学術会議会長 近 藤 次 郎

ただ頭の中で考えているだけでは十分でなくて、現実に見ることが科学の始まりである。虫眼鏡は英語ではMagnifying glass（拡大鏡）と書かれているが、望遠鏡や顕微鏡が発見されたのは、およそ7世紀の始まりの頃である。ガリレオの望遠鏡による天体観測から近代科学が始まったと云っても、大げさではないだろう。顕微鏡もおよそ、その頃に始まり、現在では電子顕微鏡などが発見されて、科学の進歩に大きな影響を与えていることは良く知られている。

さて、虫眼鏡というのは誰が名付けたのかははっきりしないが、確かにぴったりの表現であると思う。もちろん拡大鏡とも呼ばれるが、これは恐らく蟻やコウロギ、蚤などのような小さい虫ばかりではなく、昆虫の複眼を見たり、トンボの羽根を拡大して見たりするための一番簡単な道具であろう。

このように自然物を見ることは非常に大切である。近頃は小中学校の授業時間数を短縮して、ゆとりの教育を行おうとしているが、その時、真先に低学年の理科の時間が削られていることは、誠

に心配である。子供たちが理科の時間に昆虫を見たり、トンボやカマキリを捕まえたり、小川でどじょうや小鮒を掬ったりする体験は、科学の興味を育てるために極めて大事なものである。

この頃、週休二日制になってゆとりが出来るのは結構なことであるが、その時間が塾通いに使われ、観測や体験ではなくて暗記中心のガリ勉になってしまうことは、大げさに云えば日本の科学の将来にとって憂慮すべきことであると考え。近頃では大学生の理工学部離れと称して、この方面の学生数が減ってくることが心配されているが、幼児の時代に昆虫などをよく見て育つことがどんなに大切かは、科学者の伝記などを見ていれば直ちに判ることである。それには、親や兄弟が、そして学校の先生などが、子供たちを野山に連れだしてやる必要がある。この若年時の楽しい野外体験は、将来の科学する心の種となるに違いないからである。

子供たちの豊かな感性と創造力を育むためにも、日本ホタルの会はさまざまな活動を展開して行きたい。

ホタルの光で環境保全

日本ホタルの会理事／麻布大学名誉教授 宇田川 龍 男

ニュースレターもいよいよ創刊号が刊行されることとなり、ホタルの里を全国にひろげる中核として活動を開始したのは、ホタルを通じての自然保護、環境保全の普及にはこの上もないことである。

幸いにも、日本ホタルの会は官民が協力一致して、一丸となっているのは、他に見られない存在である。過去2回のシンポジウムには環境庁、建設省、農林水産省をはじめ多くの都道府県からの参加、ならびに熱心な市町村や大企業、これに主婦による発表もあり、会場は満員の盛況で熱気に

あふれた。

これから見ても、ホタルに対する感情はいかに日本人の心に染み込んでいるかがわかる。おそらく、遺伝子DNAに刻み込まれているのであろう。ホタルと言えば、まだ見たこともない都会の青少年でも、すぐ清流を連想し、自然に接したいと思うに違いない。

昨秋のこと、熊本市の動植物公園を訪れた折、昔なつかしい市電を降りて向かう途中に、「ホタルを守りましょう」の立て札が橋のたもとにあった。これには、環境を汚さない注意が書いてあり、

末尾に熊本県自然保護課とこの流域自治体名が書かれていた。まさに官民一体による保護の実証で、うれしく思った次第である。

また、村おこしにしている例も全国各地にあって、ホタルによって自然保護や環境保全の関心を

高めているのは、誠に喜ばしい限りである。

日本ホタルの会は、身近な生き物や自然についての正しい知識の普及啓蒙に努めると共に、ホタルが生息するような環境の保全と再生に積極的に取り組んで行きたい。

ホタルの飛ぶ人里を目指して

日本ホタルの会理事／勸東京動物園協会常任理事 矢 島 稔

人は自然を知り自然から学ばなければ人間足り得ないという考えが私にはあります。

同時に草であれ、動物であれ生きている環境といっしょに理解することが必要だと思います。

ところが年を追うごとに私たちの生活は便利になりましたが、自然とのふれあいは少なくなり四季の移り変わりにすら気がつかない状態になってきました。これではいけないと思い、人が調べてみるとチョウもトンボも少なくなりホタルなんて見たこともないという人が多くなっている事もわかりました。

そして市民の中には自分たちの手で環境を守り動植物を保護しようという運動を展開する動きがみられるようになりました。

私自身もその必要性を痛感し、仕事として昆虫園の中で小動物の繁殖や保護の方法について調べ、その実現につとめてきました。

しかし、一人の力でできる事は限られています。

丁度こう思っていた時に大場さんと宮下さんに会ったのです。

みんなで力をあわせ、ホタルをシンボルとする身近な環境の保全について検討し、今何をすべきかを考え、具体的に実施する方向を示そうではないかという点で意見が一致したのです。ですからホタルは一つのシンボルであって人里の主として水辺環境の保全と再現がこの会のねらいです。

云う迄もありませんがホタルの幼虫は流れの中でくらしカワニナを捕食しています。しかし、カワニナはある条件を保った水質と植物プランクトンがなければ生きていられません。

そのためには魚など水生動物の排泄物が必要ですし適度に陽の当たる流れとそれをかこむ草や木がなければホタルは生存できません。

つまり人里全体が私たちの対象で、その保全を行政や企業の人とも協力して実施したいのです。

日本ホタルの会について

日本ホタルの会は、研究・教育・行政・自治体などのさまざまな立場で、ホタルと人里に強い関心をもっている人々により1992年4月に発足した団体です。

当会の活動の目的は、ホタルに代表されるような身近な生き物たちと共に生活できるような環境の保全および再生を積極的に、かつ、適切に推進すること。また、身近な生き物たちを、科学と文化をあわせて多面的にとらえ、我々の生活をもっ

と豊かな、広がりあるものにしてゆくことにあります。

身近な生き物たちの生活について、および、それらの身近な生き物たちが生息する豊かな人里環境と人の生活・文化とのかかわりについての調査研究活動を行います。さらに、それらの調査研究に基づき、それぞれの地域の特性にあった環境の保全や再生のための提言を行います。あわせて、シンポジウムや研修会の開催、映像資料や文献情報の提供、機関誌やニュースレターの発行などの普及活動をしています。

南西諸島のホタルたち(1)

横須賀市自然博物館 大場信義

与那国島からトカラ諸島に連なって並ぶ南西諸島には、数多くの固有な陸生のホタルが生息している。そのホタルの主な生息場所は森や畑に接した人家周辺であることが多く、ゲンジボタルやヘイケボタルと同様に、やはり人里の生物といえる。美しい珊瑚礁の島々からなる南西諸島は、観光地としても開発・整備、また、農地の土地改良事業が進み、旧来の農地の景観は残り少なくなってきた。私は十数年間にわたり、毎年南西諸島のホタルを観察し続けてきたが、ホタルの生息状況と環境の変貌ぶりに驚かざるを得ない。物言わぬホタルたちが残して欲しい環境とはどのようなものなのかをささやかながら代弁してみたい。

■西表島から発見された新種のホタル

私はホタルの一般的なイメージを根底から覆すようなホタルを、思いも寄らないごく身近な人家周辺から発見した。生息地は旧家の昔ながらの石垣や畑周辺の土手であり、何も認識されなければとても保護の対象にもなりそうもない場所である。ホタルは冬に出現し、雌だけが発光、しかも翅が完全に退化して芋虫のような形をしている。雄は通常のホタルと同様に翅を有し、素早く飛翔するが、発光しない。このホタルの活動時間は約20分間と短い。雌は雄を誘引するときには、尾端にある大きな発光器を上方に向けて強く発光するが、交尾後は発光を停止し、土に潜って産卵する。雌はドーナツ状に体を丸めて卵を抱えて保護する。このときに少しでも刺激を加えると、雌は各体節にある3個のスポット状の発光器を光らせる(1面写真)。つまりこの雌は雄を誘引するときと卵を護るときとは発光する部位や光かたを劇的に使い分けているのである。こうした行動は世界で初めて認識されたものであり、西表島のこのホタルだけが持ち合わせている習性である。スイスの

研究者との共同研究の結果、このホタルは*Rhagophthalmus*属の1新種であることが判明し、近く公表される見込みである。なお、この新種ホタルに近縁のホタルがマレー半島と南米に分布するが、発光行動を切り替えず、体節の3個の発光器を光らせるだけである。但し、南米のホタルは頭部から赤色の光を放つ。これら3種のホタルの類似は、西表島のホタルが東南アジア、さらには南アメリカまでに及ぶ世界に関連づけられることを示唆している。このような世界の遺産ともいえるほどのホタルが、このままでは人知れずに消え去ってしまうであろう。旧い町並み保全は人間の歴史遺産を継承すると同時にこうした自然遺産をも結果的に継承することにつながる。これらは他に代えがたい特徴ある観光資源にもなりうるので、工夫次第では人間活動との共存は十分可能であろう。

■石垣島の森に広がる光の絨毯

5月の八重山諸島では想像を絶する数のヤエヤマボタルが森一面に飛翔し発光する。このホタルの雄は草丈すれすれに平面的に飛翔発光するので、あたかも光の絨毯のような幻想的光景となる。ヤエヤマボタルの活動時間は約30分間であり、以後は全く発光しない。このために、少し時間がずれただけでも、この素晴らしく感動的な光の舞をみることができず、一般にはほとんど知られていない。無数の光の乱舞を一度でもみたならば、もはやたくさんの生命を支えているこのような森を破壊することはとてもできなくなるであろう。しかしこの生息地の一つは、観光道路の再整備事業によって失われ広い駐車場と西洋シバの斜面地に変貌した。この生息地が人々に認識されていたならば、むしろ観光資源として保全し活用されたであろう。今後はこうした事態を回避するために十分な事前調査が望まれる。(つづく)

94年度会員募集中

日本ホタルの会では、新規会員（1994年度）を募集しています。入会ご希望の方、引き続きニュースレターをご購読なさりたい方は、折込の入会申込書にご記入の上、当会事務局までFAXまたは郵便でお送り下さい。

会費更新の手続きはお早めに

日本ホタルの会の会費は年度会費制なので、毎年3月で会費切れとなります。

現在、94年度会費の受付中です。同封の郵便振替用紙にてご送金下さるようお願い致します。

当会の活動は、皆様の会費により成り立っています。引き続き、ご支援下さいますようお願い致します。

機関誌「ホタルと人里」No.2

日本ホタルの会 編集発行 1994

第2回「ホタルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウムの報告書。人里の創生をテーマに、これまでの自然を征服するという考えとは異なる新しい価値観について行政、企業、市民など様々な立場からの提言と活動を紹介。うるおいのある自然環境の保全・再生のための基本的な考え方をわかりやすく解説。当会の機関誌としての限定版につき、会員のみに配布。購読ご希望の方は当会にご入会下さい。

研修会のご案内**「ホタルの里づくり、そのすべて」**

場所 つくば市ゆかりの森・森のセンター
(茨城県つくば市)

日時 1994年3月4日（金）14:30～20:00

14:30～

- 1) ホタルの正しい飼い方
- 2) ホタルの生息する環境とは?
- 3) ホタルの里づくり、その現状と問題点

18:30～

- 4) 総合討論（懇親会）

講師 矢島 稔、大場信義・他

受講資格 個人・公的団体・法人企業会員

資料代 3,000円

懇親会・宿泊（朝食付き）10,000円

（付属の宿泊施設に泊られます）

申込締切 2月15日まで

正会員の方には申込書をお送りしました。受講ご希望の方は事務局までお問い合わせ下さい。

人里へのニュースレター 創刊号 平成6年1月25日発行

編集 日本ホタルの会 ニュースレター編集委員会

発行 日本ホタルの会

〒104 東京都中央区銀座3-14-18 小野寺ビル5階

TEL 03-3248-3782 FAX 03-3248-3784

印刷 (有)ア レ ス

〒305 茨城県つくば市竹園2-11-6

TEL 0298-53-8188 FAX 0298-53-8177



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY